

環境の E U、規範の政治

白井陽一郎 新潟国際情報大学

2013年7月27日

慶應 E U 研究会

本年3月に刊行した拙著『環境の E U、規範の政治』について、特に第一部の環境政治の部分を中心に、概略を報告した。環境規範がその発展とともにいかに政治のツールとされ、域内の統合と域外でのプレゼンス向上に利用されていったのかが、本書第一部の中心テーマである。報告では、このテーマに対する本書のアプローチにとくに時間をさいて、説明した（本書第二部の理論編については、ごく簡単な紹介にとどめた）。そのアプローチに関してとりわけ強調したのが、（E U 法創出・実行の礎石となる）政治合意による共有規範の集積—本書ではこれを先行研究に倣ってアキ・ポリティークと呼んだ—と、この集積を通じて構築される環境規範言説の規制的な役割であり、かつ、域内の環境スタンダードを対外的に発信してゆく E U の、グリーン・アイデンティティともいうべきグローバル社会におけるその存在のあり方であった。

オーディエンスからは貴重なコメント的質問をいただくことができた。大きく次の三点にまとめておきたい。

(1) （本書第三章および第五章に関して）➡ E U におけるデモクラシーの質について、現在それが極右とアンチ E U のふたつの勢力の（おそらくは相互に関連した）顕著な広がりにより、変質し悪化しているように見受けられるのだが、これをとくに（環境のガバナンスとデモ

クラシーに関する) 本書の視点から見た場合、どのような状況の生起として解することができるであろうか。

(2) (本書第四章および第五章に関して) → 規範パワーとしてのEUの対外的な振る舞いは、現在のところ、ヨーロッパ利益を第一次的に志向する戦略の重視へと、変質を遂げているように見受けられるのだが、この点、対外環境行動の側面からは、どうみることができるか。また(かりに変質が見られるとして)、その要因は奈辺に求められると考えるか。

(3) (本書第四章に関して) → 国際標準化をEU主導で進めようという動きに対して、アジアは何ができるだろうか。EUに対抗してアジアが主導しようとする場合、EUがアジアから学ぶべきものとして、何を想定できるだろうか。そもそもアジアがEUに発信できるものとして、何があるだろうか。

以上の質問的コメントのそれぞれに対して、可能なかぎりの回答を試みたのであるが、それはもちろん全きものでは決してありえず、今後の研究課題を豊かにしてくれる貴重な糧として、継続して考察していくこととしたい。質問・コメントをくださった方々に、心よりの謝意を表するしだいである。